

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	森田 健一
論文題目	「私」と無意識の出会い —記憶想起時の主観的体験に着目して—		
(論文内容の要旨)			
本論文は、主体としての「私」が、いかに「無意識との出会い」を主観的に体験しているのかという側面に着目し、そのありようを多角的に検討したものである。第Ⅰ部では、無意識を体験する一つの側面としての「記憶想起」に着目した基礎的研究によって、その体験様式を実証的に検討し、続く第Ⅱ部では、第Ⅰ部で得られた視点を生かしながら、事例研究によってより多角的な視点からの検討がなされた。 まずⅠ部第1章では、記憶の想起視点に着目して検討がなされた。記憶表象が「私」の元へ立ち現れるとき、その想起視点は大きく分けて二つある。自身の視点から世界をまなざす「内的視点」と、自身の外側から客観的にまなざす「外的視点」である。通常そうした想起視点は無意識的に選択されるものであるが、本研究においては、幼児期記憶に焦点を当てた質問紙研究を行い、その結果、それぞれの視点に固有な特徴が見出された。また、そうした特徴に注目しながら、連想記憶における内的体験についても検討し、心理療法の場でクライアント（以下、C1）の記憶の語りを聞く際に、想起視点に着目することの意義について論じられた。 第2章では、においによって記憶が想起されるプルースト現象の体験構造が検討された。質問紙調査によってその体験構造を理解する5つの次元を見出し、面接調査によってそれぞれの次元の体験を詳細に検討した。主体の意図にかかわらず記憶の方が「私」のもとに立ち現われてくる不随意想起をとりあげることで、「私」の存在基盤を揺さぶるような体験のありようが描き出されるとともに、面接者を前に語ることによって動く無意識のダイナミズムについても検討された。 第3章では、記憶研究のレビューをおこない、心理臨床的観点の特有性が述べられた。すなわち、記憶は過去の客観的事実の痕跡であるという静的なものよりも「私」という主体によって「今、ここ」で生み出される動的なものという側面が重視されているという点である。さらに、「私」と記憶の双方が変容することを視野にいれるという観点からは、それらの変容を包括してまなざす「魂」という視点を持つことが有用であるとの試論が展開された。 続く第Ⅱ部では、事例研究が行われた。第Ⅰ部で見出された知見を踏まえながらも、記憶のみならず、思考や感情を含めながら、行動の背景にある無意識のありようを探り、無意識と出会う「私」の主観的体験について多角的に検討された。 まず第4章では、C1に、無意識のうちに影響を与えている亡き両親との関係の記憶が、面接を経て相対化され、むやみに振り回されることなく、「私」のもとに受け入			

れることが可能になっていった事例について検討された。

第5章では、C1が夢を丁寧に記録し、その世界をセラピスト（以下、Th）とともに眺めるうちに、自身の内的なテーマが明らかになってゆき、それを自己理解のヒントとして積極的に生かすことで、力強い主体性が獲得されていった事例について検討された。

第6章では、形のない何かに追われる反復夢を1年以上見ていたC1が、面接の場でThを前に想起し語ることで、無意識との出会いが生じ、やがて夢の内容とともに、現実での「私」のありようも変容していった事例について検討された。

第7章では、様々な症状として苦しめられながらも、それはC1が命を賭してでも渴望する「私」と無意識との出会いに伴うものであり、症状は単に取り除けばいいものではなく、C1の主観的体験に寄り添ってまなざすことの重要性が強く感じられた事例について検討された。

終章においては、心理療法において、無意識という概念を想定し重視することの大切さについて述べられ、それと「私」との出会いという観点からそのプロセスを論じた本論文の意義が確認された。また、クライアントの主観的体験に寄り添うことの重要性について、多角的な検討を通して論じられた。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせ

て、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

私たちの日常生活においては、「無意識との出会い」として理解できるような様々な体験が起こっている。本論文は、主体としての「私」がいかに関これらの主観的に体験しているのかという側面に着目し、そのありようを多角的に検討したものである。第Ⅰ部では、無意識を体験する一つの側面としての「記憶想起」に着目した基礎的研究によって、その体験様式を実証的に検討し、続く第Ⅱ部では、第Ⅰ部で得られた視点を生かしながら、事例研究によってより多角的な視点からの検討がなされた。

主体と「無意識との出会い」というテーマは、心理臨床の中心をなすものであり、その重要性は言うまでもない。しかし、あまりにも大きなテーマであり、それを論じるための切り口を見出すことは容易ではないだろう。しかし、本論文は、そのテーマの大きさに臆することなく、真正面から取り組んでいる。心理臨床における重要なテーマに果敢に取り組んだことがまず評価されるだろう。

第Ⅰ部第1章では、記憶の想起視点の差に着目して検討がなされた。すなわち、自身の視点から世界をまなざす「内的視点」と、自身の外側から客観的にまなざす「外的視点」である。通常そうした想起視点は無意識的に選択されるものであるが、本研究においては、幼児期記憶に焦点を当てた質問紙研究を行い、その結果、それぞれの視点に固有な特徴が見出された。その結果、心理療法の場でクライアントの記憶の語りを聞く際に、想起視点に着目することの意義について論じられている。また、第2章では、においによって記憶が想起されるプルースト現象の体験構造が、質問紙調査と面接調査によって検討された。主体の意図にかかわらず記憶の方が「私」のもとに立ち現われてくる不随意想起をとりあげることで、「私」の存在基盤を揺さぶるような体験のありようが描き出されるとともに、面接者を前に語ることによって動く無意識のダイナミズムが明らかにされている。

「無意識との出会い」のプロセスを明らかにするために、「記憶の想起」という方法を採用していることは、本論文のユニークな点であり、実証的なアプローチにより「無意識」への扉をたたいたことは、高く評価される。特に、想起の「視点」に着目した手法と結果は、心理臨床への貢献が認められるだろう。

また、第3章では、記憶研究のレビューをおこない、心理臨床的観点の特有性が述べられた。すなわち、記憶は過去の客観的事実の痕跡であるという静的なものよりも「私」という主体によって「今、ここ」で生み出される動的なものという側面が重視されているという点である。さらに、「私」と記憶の双方が変容することを視野にいれるという観点からは、それらの変容を包括してまなざす「魂」という視点を持つことが有用であるとの試論が展開された。記憶研究においては、丁寧にレ

(続紙 4)

ビューがなされており、従来認知心理学等で中心적으로とりあつかわれてきた記憶研究を心理臨床学的観点から取り上げることの意義が明らかにされたと言えるだろう。

続く第Ⅱ部では、4つの事例を取り上げ、事例研究が行われた。第Ⅰ部で見出された知見を踏まえながらも、記憶のみならず、思考や感情を含めながら、行動の背景にある無意識のありようを探り、無意識と出会う「私」の主観的体験について多角的に検討された。

事例においては、夢が多く取り上げられており、それぞれの事例におけるプロセスや、「無意識」と出会わされた主体の苦しみや動揺が明らかにされ、また、それに関わるセラピストとの関わりが、丁寧に叙述されている。

終章においては、心理療法において、無意識という概念を想定し重視することが持つ意味に関して、これまでの論をまとめながら述べられ、無意識と「私」との出会いという観点からそのプロセスを論じた本論文の意義が確認された。また、クライエントの主観的体験に寄り添うことの重要性について、多角的な検討を通して論じられている。

試問においては、無意識の無意識たるゆえんである、表象不可能性、つまり「出会えなさ」という観点がぬけおちているのではないかという指摘がなされ、それについて、討議された。また、それに関連して、事例における夢の解釈も、あくまで自我の観点から解釈がなされていることが指摘された。さらに、なぜこの4事例がとりあげられたのか、その必然性が明らかにされていないことも指摘され、討議された。しかし、こうした指摘は、本研究のさらなる発展性を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また平成25年 1 月 15 日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降